



十二 事件III

美里は病室の前に立った。会社の警備ロボットが美里の顔を確認した。ドアが自動で開いた。ドアが開くと、白いシーツに覆われたベッドと透けるように白い横顔と肩まで掛かる長い髪が見えた。また、そのベッドを見つめるように白い服の支配人が座っていた。

支配人が顔を上げた。美里と目が合う。でも、何も言わない。黙ったままだ。ドアの開閉音に気付いたのか、横たわる黒髪がこちらを向いた。

「ちひろさん。大丈夫ですか」

美里はその顔を見て安心した。ちひろさんが生きていたからだ。

「ああ。大丈夫だ」

ちひろさんに代わって、支配人が答える。あなたには聞いていないのに。心の中で毒づきながらも、支配人が答えるぐらいだから、命に別条はないのだろう。これまでも、支配人は御世辞をつかない。誤魔化もししない。正確な事実だけを述べる。愛想がないと言えはしないのだが、逆に言えば、それだけ信用できるということだ。

「ほんとに、大丈夫だから」

ちひろさんは支配人の言葉を肯定するかのように口角と頬を上げた。眼も笑っている。頬もほんのりと赤い。血色はよさそうだ。その姿を見て、嘘じゃない、本当だ。安心は深まった。でも、よく考えれば、美里たちハートケア士はあくまでも仕事上の付き合いだけで、事務所でたわいのない会話をするだけだ。相手が不幸になろうが、幸福になろうが関係はない、だけど、ちひろさんに関しては、何か、心の奥から親しみの感情が湧いてくる。それだけに、今回のように、入院したという話を聞いた時には、いてもたってもいられない気持ちになった。

「折角、捕まえられると思ったんだけど・・・」

ちひろさんは、なんだか、小川でメダカを見つけて、両手で救おうとしたけれど救えなかった子どものような言い方をした。と、同時に、ちひろさんもあたしのようにあいつを見つける任務を黒服にまかせられていたこと知った。支配人はそのことをあたしには教えてくれていない。

その非難の眼差しを支配人に向ける。だが、支配人は美里の視線を意図的に外し、左手の人差

し指を唇の前に立て、左頬にくぼみを作りながら、ちひろさんの顔を見た。ちひろさんは一瞬で、状況を理解した。さすが、支配人はこの店の一番のハートケア士だ。しかし、こんな場所で感心している場合ではない。

「あら。あなたも命令されていたのね」

ちひろさんは支配人の顔と美里の顔を交互に見た。

「それなら、話が早いわ。説明しないと」

ちひろさんがベッドから上半身だけを起き上がろうとした。

「是非、その話を聞きたいものだ」

美里の背中から声が聞こえた。聞き覚えのある声。そう、黒服の声だ。ちひろさんが無事だったのに安心していただけか、病室のドアが開閉するのに気づかなかった。黒服はちひろさんのベッドを挟んで支配人と反対側に立った。つまり、美里の横に並んだ。

美里が以前、黒服に会った時は、暗い部屋だったし、椅子に座っていたので気づかなかったが、黒服は背が高い。美里の頭の上に手のひら一つ分を足したぐらいだ。美里は身長が160センチだから、黒服は180センチ位はあるのか。そして、もっと驚くことは、横顔が支配人とそっくりだ。あらためて、支配人の顔を見る。

まさか、この病室も事務所のよう鏡張りの部屋なのか。いや、鏡ならば、服装は同じなはずだ。支配人はいつものように白服で、黒服は美里が名付けた通り全身黒い色を身に付けている。やはり、別人だ。別人だが、顔が、姿形が、二人ともそっくりだ。同一人物だ。

美里が驚いたまま、ちひろさんの顔を見る。ちひろさんの顔の表情には変化がない。これはいつもの癖か。それとも、支配人と黒服が瓜二つだということを知っていたのか。ということは、三人は、既に顔見知りなのか。美里だけが知らなかったのか。

「早く、あいつの話を聞かせてくれ」

黒服は美里たちの驚きを意に介していない。それよりも、自分の任務を先行させている。

「やめろ。彼女は、今、目覚めたばかりだ。もう少し、時間が必要だ」

同じ顔をした支配人が手で制する。

「彼女のような被害者をまだ増やす気か」

黒服は支配人を睨む。

「犯人を捕まえるのはお前たちの仕事だろ。それに彼女は被害者じゃない。犠牲者だ」

「だからこそ、情報が欲しい。それに、被害者にしろ、犠牲者にしろ、どちらにせよ同じだ」

「同じでも意味が違う。こちらが協力しているのに、お前たちが犯人を捕まえないからこういう結果になるんだ。そう言う意味では、犠牲者だ」

「彼女が意識を失ったのは、犯人じゃなくて、俺たちのせいというわけか」

白服と黒服は語気が荒くないものの、突き刺すような言葉で応酬する。美里とちひろはそんな二人の様子を黙ったまま見ているだけだ。

「それよりも先に、俺たちの関係を説明したほうがいいのではないか」

黒服はその場の雰囲気を変えようと、ふうと、ため息をつくと、首を左右にこねこねと動かした。

「どうぞ、ご自由に」

支配人は自分から説明はしなかった。代わりに、黒服が支配人と同じ形の唇を開いて、動かし始めた。。

黒服が言うには、支配人と自分は双子の兄弟で、黒服が兄、支配人が弟だそうだ。黒服は、政府の警察機関に勤務しており、ハートケア士たちの精神を破壊している犯人、あいつを探しているとのことだ。また、支配人も、以前は、黒服と同じく警察機関に勤めていたが、理由は不明なもの、退職して、今は、人の心を癒すハートケア士の会社の支配人をしているのだ。ある意味、美里たちが守られてきたのも、支配人の兄である黒服のおかげであり、支配人の過去の経歴に寄るものかもしれない。

「さあ。俺たちの話は終わった。あいつの話を聞きたい」

黒服の目がちひろさんに向いた。ちひろさんは美里と支配人の顔を見る。

「いいの？」

「ああ。いい。俺たち四人はもう抜けられない関係だ」

支配人が首を縦に振った。

「あいつと出会ったのは・・・」

ちひろさんが目をつぶった。そして、額に皺を寄せながら、記憶を呼び戻そうとした。